

### 31【P2】I-300

当帰芍薬散の末梢血流量増加作用を有する成分の探索

○山岸 宏和<sup>1</sup>, 福井 舞<sup>1</sup>, 中澤 孝浩<sup>1</sup>, 安田 高明<sup>1</sup>, 上田 條二<sup>1</sup>, 大澤 啓助<sup>1</sup>(<sup>1</sup>東北薬大)

【目的】婦人病薬として冷え症などに用いられている当帰芍薬散の活性成分探索の一環として、その構成生薬のうち活性のあった当帰の末梢血流量増加作用を有する成分の検討を行った。

【方法】1)実験動物：ddY 系雄性マウス(30-40g)を用い、リン酸ベタメタゾンを7日間後肢に筋肉内投与(1.6mg/kg/day)し、瘀血様病態マウスを作成した。2)分画方法：当帰を熱水で2時間抽出し、得られた抽出液を水と酢酸エチルで分配した。次いで、活性が認められた酢酸エチル層をカラムクロマトグラフィー及び分取HPLCにより活性成分の単離を行った。3)測定方法：分画した画分を単回投与では測定1時間前、反復投与では1日1回8日間瘀血様病態マウスに経口投与(100mg/kg)し、ペントバルビタール麻酔(70mg/kg)を行い、背部末梢血流領域の血流量をレーザードップラー血流計を用いて30分間測定した。

【結果・考察】瘀血様病態マウスの末梢血流量に対する影響を検討し、furocoumarin 誘導体である methoxsalen 及び bergapten を単離した。なお、これらの化合物は各種スペクトルデータ等の結果から構造を明らかにした。さらに、前者に、より強い作用が認められた。その詳細な作用機序については現在検討中である。

